

ドイツの儼として動かし難き歴史に敬意を表する正しき歴史家の立場であると謂はねばならないであらう。

第三編はドイツ精神文化の概観にあてられ、ナチス文化に關する可成り多方面の紹介もされてゐるが、現在ドイツに於ける狹義の文化は今尙形成途上にあつて、古典時代以降の謂はゞ過去の文化が依然絢爛たる光を放つてゐるの感が深い。

兎もあれ本書は僅にポケット版約四〇〇頁の中に論述せられたるドイツの現勢史に對する啓蒙的著述ではあるが、私は、ドイツ及びドイツ史を敬愛するが故にこそ飽迄其正しき把握と解明に努められんとした著者及び夙にドイツ近世史の研究に専念され今茲に著者の協力者となられた林健太郎氏に對し敬意を表し度い。

近く同じ著者に依り列強現勢史・ロシアの刊行ありと聞く。本書を読み此近き刊行を待つ者私だけではあるまい。(富山房百科文庫第九冊、現代ドイツ統計主要一般參考書、人名索引收録、定價八拾錢)〔西井克己〕

G. Dykmans, La Vie Economique sous

l'Ancien Empire. Paris 1936

C. Dykmans, L'Organisation Sociale sous

l'Ancien Empire. Paris

右二著は共に Histoire Economique et Sociale de l'Ancienne l'Egypte に屬し、その第二卷、第三卷をなすものである。第一卷は Des Origines aux Thinites. Paris 1935 と稱せられ夫々相關聯する

所があるが如きも偶目の機會が未だ與へられぬのは遺憾である。先づ注意すべきは著者はリエージュ大學の商學博士、國民經濟・社會經濟の大家たる事である。従ひて、埃及學者乃至一般史學者とその立場に於て異なる點である。

第二卷は本文二九六頁、年代をとき、農業・牧畜漁獵・不動産及び地方民、鑛山・石切場・工業、企業組織と勞働者の狀態、物資の循環、結論より成つて居る。各章に於て示唆に富む記述が多いが、原始的産業につき從來、埃及學者の説く所に一步進めたる事、他、金屬の使用につき特に社會情勢と關聯して説きたる事、宮廷御用の工房の特別なる組織に推定を立てたる事、海上交通にしても、地中海に於て消極的なるも、紅海に於て積極的なる事を示して居る。

第三卷は本文二四七頁、先づ Thinites の王朝の王政確立をとき、次に第三・第四王朝に當る Memphites の大造營者の時代、第五王朝の墓頭政治の發生を擧げ、最後に第六王朝の封建制度の近接を以て終つて居る。社會地理學の立場も説かれて居り、社會學的なる解釋が餘程強いやうに見受けられた。就中、Visit の生活を吟味し、地方の政治情勢の變遷に鋭い觀察を加へ、Imira Nout Mout「新市の支配者に就きての徹底せる解決を與へむとした努力は敬服すべきものがある。

由來、社會學者・經濟學者が古代埃及を觀る場合に稍もすれば彼等の持てる立場より律せむとする事が屢々あつて、一見解として尤もながら、その間に重要な事實を等閑に附せる機がないで

もない。然も、今 Dykmans の著作を見るにこの方面の考慮が相當拂はれて居ると思はれる。第三卷の末尾に埃及用語表を備へて居り、これには埃及學の專攻者 J. Pirame が關與せるものである。依りて、この種の著作が單に古王國のみに限らず、古代埃及全體に互りて發表せられるを望む次第である。(岡島誠太郎)

Beer, M.: Early British Economics.

—from the XIIIth to the middle of the XVIIIth century.—

Contents. I. The Schoolmen and their Problems. II. Alexander of Hales (Alensis). III. Ricardus de Media Villa. IV. John Duns Scotus. V. The Legacy of the Schoolmen. VI. The Age of Mercantilism: General View. VII. Sixteenth Century Economics. VIII. Balance of Trade. IX. Importance of Manufacture. X. Recapitulation. XI. Transition to Liberal Economics. XII. Retrospect: British Economics in 1750. Index.

十三世紀から十八世紀半に至る數世紀間に於て英國の社會發展に伴ひ引起された經濟的・倫理的諸問題を概觀し、之等諸問題に對して當時代の學者・貿易商人・經濟記者・哲學者に依つて發表せられた諸學說を系統的・組織的に考察せんとするのが本書の目的である。

而して Beer の努力は先づ、後者即ち英國に於ける初期經濟學

說の發展過程を有機的に體系付ける事に向けられてゐる。こゝに於て著者は、各章を時代順に排列し、次で各時代の經濟學說・經濟理論を分類し、最後に、かく分類された各時代の指導的經濟學說を歴史的に位置付けると共に、又各時代の經濟觀念の占むる歴史的位置をも鮮明ならしめんとする物である。

十二・三世紀の英國思想界を指導した Græco-Roman logic and dialectic はフランスに學んだ John of Salisbury 等に依つて大陸からもたらされた物であるが、このスコラ主義思想に本づいた嚴格な倫理觀念と、之に對立して當時伸長の第一歩を踏み出した英國通商事業の經濟的事實との間に存在する矛盾解決は其後數世紀間に互る英國言論界の中心問題であつた。(而して英國の通商界が部落・都市中心の初期形態を脱して國際化されると共に、即、英國の海上支配の必要性が認知され來ると共に、この問題は政府の經濟政策と相關聯して、重商主義經濟學說の實踐的應用に迄展開して行つた。六十頁以下の三章)

やううの doctrine と facts との對立の間に立つて兩者の衝突を緩和し、英國經濟界の發展を圓滑ならしめんとした諸スコラ學者第二・三・四・五章)は新舊南聖書 Ambrose, Augustine, Chrysostom, Cassiodorus の如き教父、及 Isidor, Peter Lombard の如き諸權威の勞作から出發して重商主義經濟理論の確立に至る迄、斷えずの努力を續け、英國に於ける經驗說の基を開いたのである(二四頁)。彼等スコラ哲學者の間に成立した共通理念は、その理論的根據に